ミオヤの光

法身の巻

○宇宙の本體
本體論と宇宙論
唯物論
平行論
汎心論
○表示的擬人觀
汎神論
神の超絶と内容
歸趣の理性
○法身
本質と體量
内容無盡の德を具す
法身に顯動と不動の二面あり
生産門（緣起門）
攝取門（法身般若解脱）

宇宙の本體

（形而上學に）一、本體論　二、宇宙論（即ち神學的）

本體論の問題は實在の本質如何と云ふにあり。蓋し宇宙萬象多樣なりと雖も二大種に還元することを得。空間を占有し空間に運動する物體並に空間の性質を有せざる心意即ち精神となり。萬物は物心二元と、また其根底は同一にして一個に還元す。

一元論は唯心論唯物論あり。

二元論は萬有は全然性を異にする二種の本體即ち物と心（延長と思惟）とす。此の兩者より成るの見解は通俗の頭腦に入り易し。されど哲學は二元論を排して一元論に到達せんことを欲す。一元論に物を以て唯一の實在とする唯物論と心を以て終極の實在とする唯心論と、次に實在の性質は不可知的となすとあり。

第二宇宙論。一切事物の關係は如何に抽象せば可なりやと、換言せば宇宙を構成する諸の部分相互の關係また全體と部分との關係はいかに見るべきかの問題に、原子論

超絶神論、擬人的神論、内在神論即ち汎神論等あり。萬有は互に全然獨立の無數の要素より起るとは原子論なり。

萬有に遍く秩序調和統一の事實あるは曾に獨立の無數の要素の偶然の集合より成るとするを許さず、一個の統一の原理を求めんとす。此統一原理を世界以外の一神之を人間の家屋を造營する如く、世界を創造し支配し行くものとするは超絶神論擬人的神論なり。

此原理を世界以外に置かずして世界の内に在りとし世界はこの原理其物の發表顯現なりとなすは内在神論また汎神論なり。

本體の一元論は、一、外界の事實より出發すると、二、内界の事實より出發するとに依つて二種に分る。唯物論及び唯心論是れなり。前者は物質及び運動を以て實在の根本の形となし、之によりて知覺思考意志等の心意現象までも説明せんとし、後者は吾人の自己意識に於て經驗する如き内的生活の事實を以て根本の實在とし物質界はこれが顯現にすぎずとす。

近世哲學の祖デカルトは明かに二元論の主唱者なり。思へらく物體と靈魂とはその共通點をも有せざる二形式なり。物體は廣延を以て唯一の屬性とする本體。靈魂は思考を以て唯一の屬性とす。此兩本體合して萬有を構成すと。二元論は終局は一元論とならざるをえず。心意の側に感覺知覺あれば肉體に感官の刺激あり。スピノザ曰く兩者は根本に於て同一にて肉體と靈魂とは絶對的に異なるものに非ず。兩者は其根本に於て同一なり一體の兩面なるのみ。例へば同一の圓の周邊にてありながら内面より見れば凹線となり外面より見れば凸線となるか如く同一體を内面より見れば心意外面より見れば肉體なり。尚ほ又此一體兩面の關係は單に人間及び動物に限らず遍く萬有を一貫せるものなり。單一の本體は一面は物體界の形を以て一面は意識界の形を以て現じ、物の運動あれば必ず之に相當して心意の作用あり。略言せば一切の物體は必ず有心なり。一切の靈魂は有體なりと云ふべし。物心の間には相制の作用に非ずして平行の作用ありと。

此スピノザの一元論は二方面に轉せり。兩面何れかに重きを置き孰れか根本實在と

し、物質の研究に專心なる自然科學者はホッブスにしてスピノザの思想を唯心論に發展せしはライプニッツなり。

兩者は根本一なれども同等の實在の本質を示すものに非ず。實在の眞相を示すは精神なり。萬有の終局の要素たり。モナードは精神にして廣延物體は唯此精神の吾人が不完全なる智性に映ずる相なるのみ。其外認識論よりして唯心論に到達せしものはバークレイなり。殊にカント以後に至つては物體界は吾人の心意に於て其眞相を示せる實在の顯現に過ぎずとの思想は獨逸哲學者の根本觀念と稱すべし。

唯物論の主張點

萬有を構成する實在は物質なり。廣延と礙窒性とは其屬性其根本あらゆる活動音色熱電氣等一切事象此の運動より起る意識狀態なるもの其數に洩れず。

生理學物理學上の根據。心意の過程は必ず物質過程と密なる關係を有す。意識を有するものは有機物のみ。狹くは高等動物のみ。動物の中に殊に意識と關係を有する部分は神經系統なる如し。

されば科學は意識狀態の原因を此肉體の性質に求め心意過程を以て神經系統の作用なりとす。靈魂を肉體以外に說明するは科學未開時代の產物のみ。雷電なる一種の事象を雷神と云ふが如し。疾病を病神とす。自然哲學すら生活力と云ひ特殊の勢能を假定して有機に轉ずる過程を說明せんとす。

意識狀態の心意的事象に必ず前行若くは伴起する事象を發見し其相關の法則を規定するにあるのみ。すべて腦髓神經系統に於る作用のみ。靈魂などの心的勢能の原理たるべからず。

意識は物質と類を異にする特異の狀態となすは其實然らず。科學の研究によれば唯だ物質の運動の特殊の形に過ぎず。心的狀態其物は客觀に見る時は一種の生理過程に外ならず。蓋し輓近の自然科學最高原理はエネルギー保存の原理なり。或は塊の運動變じて其中に存する分子の運動となり、顯勢變じて潛勢と成る。エネルギーの形は千變萬化するも其量は寸毫も損益なしと。

今意識と生理作用との關係を見るに下の二種の場合あるべし。

一、運動の外界より入り來りて生理作用を惹起し心意作用となる場合、例へば吾人が音聲を聞くに第一に發音體より起る空氣の波動が吾人の聽神經を打ち之をして一種の生理作用を起さしめ而して此の作用は神經纖維によりて中樞機官に傳達せらる。而して一種の心意作用たる感覺を起す。心意作用たる感覺は其實末端の刺激によりて中樞機官に起されたる神經作用に外ならずと。

二、心意作用初めに起り運動を內界より外界に傳ふる場合

腕を延して一の物體を捕捉するに先づ腕の關節運動の直接の原因は筋肉纖維の收縮なり。其は動神經纖維によりて傳へられたる衝動なり。而して此衝動は中樞機官より出るものとす。そこで腕を延ばし物を捉らんとする意志を認むべし。故に知る心意過程は本來物質過程に過ぎず。換言せば動神經の纖維の興奮の原因として豫想せざるべからず。何んとなれば物質的結果は物質的原因を有せざるべからず。故に意識狀態其物のみにて物質の運動を惹起すとせばエネルギー保存と云ふ自然科學の根本原理は破れざるべからず。

比較解剖學に依れば神經系統の發達と精神の發達と並行し動物中腦髓の量に從て知能發達を異にす。動物中人類は知能發達完全大腦の容量及び其他の發達も亦動物に冠たり。又人類の中に於て氏族の腦髓の發達は其文化進步の程度を示し又知能卓越なるには腦髓も多く發達す。亦た腦病と精神の關係生理學病理學の研究に徵する。

老年に達せば精神活動に多少の衰弱ある如く而して其が腦物質の減縮と老廢とに基くは解剖學の證明する所なり。要するに一切精神病は即ち腦髓の病なり。是れ腦髓即ち精神なることを確信するにあらずやと。

宇宙論上の根據。宇宙は初めより今日の如き狀態を呈せしにあらず。初め有機物によりて精神生活意識狀態あらざりき。地球さへなき時ありき。今日の遊星系なるものは初め瓦斯狀或は星實の大魂にして此太陽初め自軸を回りつゝありしが久しきが爲め其赤道部に一帶のふくらみを生じ星雲塊の熱度減じて漸次に收縮し此一帶のふくらみは遂に中心體を離れて一個の環狀をなして中空に懸り此環狀破裂して獨立の天體とな

れり。此事數回反復されて茲に太陽を中心として回轉しつゝあり。而して遊星の體系を生ずるに至れり。吾人の棲息する地球は遊星の一なり。地球の初めは熾然液狀の一塊たりしに漸次冷却し固結して土壤岩石を生じたり。水蒸氣は凝つて水となり。此に於て地球は初めて有機物の生起を導く狀態を呈するに至る。有機物の最原始は微小なる原形質なりしも漸次內臟の組織を生じ遂には消化機官たる囊狀部及び核を備へ又分裂によりて生殖作用を營み複雜なる體系に發達するをうべき細胞を生ずるに至る。かく一方には生物體の內部が漸く分科し行きて種々の部分雜多の器官を生ずると共に生物の種類も亦漸次に分科しゆきて種々の生物を生じ其中より遂に人類なるものを出すに至れり。人類は他の生物と起源を異にするが如き一種特別の觀念を起さしめたり。されど自然科學はこの迷妄を打破し人類は決して特別なる分子として世に出されたるに非ず。其初めは他の生物と劣等の有機體より起り生存競爭を營みつゝ無數の年代を經て遂に現狀に發達せり。地球上過去の歷史に見るが如し。然らば未來はいかに晩近の天文物理等の知識に依つて之を推測すること難からず。生命と精神は其原始を想ふに其終焉を有すべし。蓋し太陽の熱の量は無限に大なりと言ふべからず。而してこの限りある熱は放散して之を補充するものなしとすれば何時か盡くる時が到來せざるべからず。斯の如き期を待たずして地球は早急に冷却し了り、一切の生命意識は絕滅するに至らざるべからず。須臾にして果敢なきものなり。是等の生命は僅かに蜉蝣一日の榮華にて本來の無に歸す。是に至つて生命なく意識なし殘るものは恒久の物質と運動の法則のみと。精神の如きは無限の物質中の小部分宇宙巨大なる歷史より見れば眞に大海の一滴とも云はざるべからず。無始無終に亘りて永久存在は物質と運動とのみ是を唯物論者の主張とす。

平行論（汎心論唯心論）

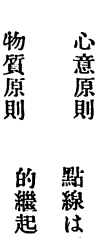
平行論に包含せる二命題。物質過程は心意過程の結果にあらずと言ふ命題の歸結、高等の有機體と雖も一個の自動機械にすぎず。

心意過程は物質過程の結果にあらずといふ命題。

心意過程は物質過程の結果にあらずといふ命題の歸結。今鐘を聞くと假定せよ、此音聲を聞く感覺の原因たるものは何なるか。蓋し此感覺は何物かの結果にして決して因果律を離れたる孤立の事象にあらざるは吾人の承認する所此の原因は何ぞやの問に答て云はんそは空氣の波動なりと。されど平行論によれば此答は許しがたし。感覺は心意過程なれば物質運動の結果たること能はず。然らば此原因は此音聲を聞く人の精神中に於て其感覺に先行せし意識狀態に求むべきか是れまた否なり。然らば此原因と認むべきものは唯一つスピノザ等の唱導せし普徧的平行論或は汎心說の假說を採用すること是れなり。換言せば一切の心意過程には必ず是れに伴起する物質種々の一切の物等が平行して伴起する心意過程是れなり。即ち鐘より起り來りたる物質の運動即ち空氣の波動の結果は唯神經の刺激と腦髓に及ぼしたる物質的の變化のみ。決して感覺と云ふ心的過程を惹起すること能はず。感覺を惹起するものは此空氣の運動に平行伴起する內的過程なりと。

空氣の振動に平行伴起せる內的過程

音聲の感覺



心意原則

物質原則

點線は平行伴起の關係を示し矢形は因果的繼起の關係を示す

空氣の波動

當にaに伴起せるA即ち空氣の波動に伴起せる內的過程が原因となりて音の感覺を起す。故に普徧的平行論を採るは世界觀の選擇に汎心論世界觀を取らざるべからざるに至る。スピノザの一體兩面論の一轉してライブニッツの唯心論に進む。

汎心論の證

吾人の自己以外に精神の存在を認むるの原理は類推の論法なり。吾人が精神の存在を認め得るは、自己意識即ち自己內部の自ら經驗する所の感覺觀念執意等の外に同樣の內的過程の存在を認むるは直接の觀察にあらず。吾人が直接に知るは物質の事象のみ。

類推法は動物界のみに限らず。

動植物は晩近の生物學者は二界の境界線を抹殺せり。

フロティスタなる名稱の下に總括せられたる生物は兩者を一個の軀體より分技せりとす。

植物には神經系統なし。故に精神なしといふ說不可なり。蛇は足なくして行き植物も亦神經なくして精神を有す。

植物は自發的運動の力を有せり。故に精神なしといふ說不可なり。植物は枝葉を日光の方に向け、其根を營養物に富める方に向け、其卷鬚を支柱たる物體の方に向け夜間また雨天に其花瓣を閉ぢ日光に開く。

動物は胚種の時間母胎に附着して自由移動の力を有せず。次に植物は却て水中に移動す。或は言はん植物の運動は自發的にあらずして物理的なりと。

無機界に於る精神存否

物心の平行は有機無機兩界を通じて普徧に存すとするの證。

(一)無機物は有機體內に入りて新たな生命精神の所有者となるが故に。

無機物質は變じて有機體となる。即ち有機體は常に一定の形體を維持し其實質は新陳代謝しゆくものにして一方には外界の物質を吸收し、又他方には絕えず之を抑出し新來の物質は以前の體質に代りて生命精神の所有者たるに至る。されば生命精神の根基は無機物の中に存し是等の物質が以前よりは一層複雜なる結合をなし一層發展し精神生活を現ずるに至る。

(二)無機物を基礎として新有機體發生するをうるが故に。

無機物が有機に入り來りて新生命の所有となるに止らず無數の動植物が無機物質を基礎として新たに發生しつゝあるは吾人の目擊する所一掬の米を地上に蒔いて數升の米に化すべく雌雄一對の鼠に與ふる時は直ちに變じて數千の生物となるべし。然らば是等の靈魂は何より來るか。精神の根基はこゝにこの無機物中に存するに非ずや。無機物に精神なしとせば精神生活の原始を說明する能はざるが故に。

晩近の自然科學は一切の物質は徹頭徹尾活動のものなりと。液體瓦斯の如きは論を

待たず、吾人が普通不動のものと認むる固體の如きも其實之を構成する分子は非常に激烈に運動しつゝあり。此分子を構成する元子また活動のものなり。動植物の自發的活動と異らず。

無機物に精神ありとするは哲學者一般の傾向なり。スピノ。ライ。ロッツエ。ヴント等の晩近の自然科學者の中に已に此說を唱導せり。植物學者ナエゲリーの如き有力なる汎心論の主唱者なり。人間の精神は普く自然界を通じて存し之に運動の生命を與へつゝあり。精神作用が吾人の地球上に於て最高等に發展せるのみと。(物理學者フリードリッエルネルの如きも)

吾人より高級包括的精神

吾人の肉體は有機體として無數の細胞を包括す。吾人の精神は是等の細胞と相當せる基本的の精神生活を包括するものと假定せよ。吾人の肉體はまた地球と云ふ一層高等なる統一の一部をなす。又地球と共に太陽系太陽系と共に全宇宙の一部をなせること恰も細胞が吾人の身體の一部をなすと異りなし。然らば吾人を初め其他有機無機の萬象の無數の小精神を包括せる高層なる精神あるが如くならざるか。先づ第一に個々の天體は一個の統一されたる精神を有するものにあらざるか。

フエヒネルは熱心に地球精神の存在を唱導す。地球は普徧的生命を有せざるか。內部の液狀部外部の陸地大洋空氣其他の部分恰も吾人の四肢幹軀等の部分と等しく有機體制の關係をなせるものにあらざるか。

地球は無數の生物が偶然集りて活動すべき物にあらずして是等一切生命胚胎掬養さるゝ母胎なり。生物は地球の所產なり。一切有生有心の事物を生產し保育しつゝある地球自身は何を以て有心有生命たること能はざるか。若し全體としての地球が其部分の精神を總括せる統一的精神を有すとせば尙ほ一層其類推の範圍を擴張して地球其他の諸天體を包括せる太陽系の如きも統一的精神を有し遂には進んで宇宙精神なるものゝ觀念に到達することをうべきなり。恰かも吾人の肉體が吾人の精神の表現たるが如く世界は此宇宙精神の表現なり。世界精神の肉體なりと云ふことをうべし。是に於て吾人は直接なる經驗自己の肉體と精神との兩面の關係よりして最間接に遠隔なる歸結

に到達することをうるなり。

自然界の事物は有機無機を通じて靈魂若くは生活力と云ふ如き（以下斷章）

表示的擬人觀

如來はビルシャナ即ち全宇宙は色心不二の大日と云へるは神の本質を表示するに人格を以てし、

物質の萬物は普徧の相關に依りて統一せられ內容生活も亦た全一なる精神に統一せられ、

一、世界は全一體個々は絕對獨立を有せず、彼等は全一中に於て其存在と本質とを有し萬物は相待規定せられたる本質の變態なり。

二、一體の本質は廣延なる物質と意識との二質に發展す而して此兩面は同等の位にあらず精神は眞の實在にして物質は唯だ意志に實現せられたる現象に過ぎず。

三、物質界に於る普徧の相制作用は全體が自己の本質を多樣の調和的變態に發展する內的目的論的に必然性の現象なり。必然性と云ふも外部より必然にさるゝにあらずして內部より發する目的に必然なるが故に本體は自由因即ち內的論理的に本質を發展す。

汎神論の可能を論究する必要の點。

一、物質界は普徧的の相制の作用普徧的の統一性を有し渾一體なり。

二、物質界の一切の部分は自發的の調和を保つものにして自然界の事物は外部より必然にされて活動を營むことなし。

三、全體としての萬有は毫も外的の制束を受けず、其運動は自己の內部より起る自發的運動として世界外に此運動を世界に傳ふる勢力なし。

四　自己に於て肉體精神なる二重を有す、此事實よりして漸次論步を進めて物質あれば必ず之に伴隨して精神生活の存することを假定せざるべからざるに至る。

五、吾人は萬有中の一小部分なり、地球の事物に於て目的衝動性即ち目的を認識せずして自ら目的に適合せる活動の存在を認む。

然らば目的とは何ぞやの問に對して思辨哲學に倣ひて云はゞ、地球の發展は生命の現化を目的として、生命の發展は意識の現化を、意識の發展は精神の現化を目的とし從て精神の發展は卽ち地球上の事實の中心的目的なりとし、從て此部分よりして全體を推すと云ふ論法にして正しとせば、吾人は尙ほ一步を進めて一切の存在の中心目的たる最高の精神生活なりと云ふも敢て其事實を誣ふるに非ず。

汎神論は數ある世界觀中單純明瞭に萬有を說明す。

精神の起原を發見せんに唯心的汎心論に於て適當の位置を與ふることをうべき唯一の世界觀なり。汎神論に依て精神生活は自餘の萬物と調和をすることを得。

原子的唯物論によれば精神生活の起原存在を說明する能はず。唯物論には精神生活は當規を逸したる偶發的一種奇異なる現象にして之が起原と存在とはとても說明することを能はざるなり。

汎神論によれば全く此難點を免るゝことをえん。卽ち精神生活は當に萬有中に適當の位置を發見するに止らず實に萬有の根底たり。且つ萬有中最重要なる位置を占む。汎心論が最妥當なる世界觀なることは古來東西古今の大思想家が一齊に之を取るにも明かなり。プラトン、アリストテレースは萬有は渾一體なり、靈にして善なり、あらゆるものゝ絕對的統一なりと曰ふ。

獨斷的唯物論の批評

論者は言ふ、世界は原子の集合其一極少部分たる腦髓の外には靈魂と云ひ精神と云ふ如きものなしと。然らば問はん、如何なる理由を以てか、

一、宇宙靈魂。目擊すること能はざるが故か。されば動物或は人類の精神と雖も目擊する能はざるは同一なり。

二、動物には腦髓神經を目擊するが故ならば、宇宙は腦髓神經を有せざるが故に靈魂を有せずとの說非なり。宇宙は器官作用の要なし。

三、宇宙の諸部分は聯絡散漫なるが故に統一の精神なしと云ふ說非なり。動物體に統一を與ふる所以のものは何ぞや。其諸部分の空間上の接近なるか。決し

て然らず。其諸部分の官能上の統一なり。動物の腦髓を構造する原子は決して互に接觸するものに非ず。されば空間上の懸隔は統一の成立を碍げず。部分の運動だに統一を保ち居らんか其距離には關せず。宇宙を構成する諸天體は其空間上の關係は疎遠なれ共其官能上運動上に於ては非常に親密なる關係を有し一片の塵芥と雖ども宇宙の他の部分と關係なくして運動すること能はざるは前既に述べたり。

四、宇宙を構成する諸天體の運動は餘りに單純にして齊一なるが故に精神を有せりとの說は非なり。動物の運動は非常に複雜にして不規則なるに反し宇宙の部分たる諸の天體の運動は之に比して餘りに單純にして齊一なり。

フエヒネル此非難に答へて言へり。吾人の腦髓いかに複雜なりとするも又如何に吾人が斯く複雜なりと云ふ點を以て高等の精神性質を有する徵候をなす傾向を有すとするも宇宙は一切の複雜を包容するものにして吾人が複雜の極となす腦髓の如きも之に洩れたるものに非ず。故に其複雜の度は殆んど名狀すべからざる程ならざるべからず然らば此高度の複雜を有する宇宙に吾人よりは一層高等の精神の宿れることを拒むべからずと云ふ。

已上獨斷的唯物論者が宇宙精神の存在を否定する理由は一として當を得ず。汎心論は他の世界觀の大難點を脫する唯一の妥當なる世界觀なりとす。

汎神論

人格とは何ぞや

汎神論の神は人格を有せずと云ふ。人格とは何ぞや。第一に人間に賦與するに人格を以てし人間の內的生活に特有の形をなし他の動物と無生物には之を有せず。吾人は即ち人格を定義して自己意識的にして合理的なる思考及び意志となすをえん。

全一なる神に斯の如く有すとは吾人の望むべからず。人間の內的生活と比較すべからず。

神の意志思考はいかなることは吾人の把捉する能はざる處なり。

人間は不完全の故に欲求あり。之れに種々の衝動欲求起る。神は圓滿の故に求むる

所あるべからず。また規定すべき衝動欲求の存すべき理なし。また人間の如き合理的意志ある謂れなし。神は圓滿具足なり。

神の動作は人の動作と全然異らざるべからず。神は全能なればなり。吾人のとは最に於ても質に於ても異ならざるべからず。吾人の活動には企圖と實行との別・目的と手段との異りあり。神は思考即ち動作となる。即ち萬有は神が意志すると共に實在となれる思考なり。

人間の道德的性質は神に賦與する能はず。神には本務もなく德もなし。神が人間の如き慈悲仁愛ならんが爲めには神自ら人間とならざるべからず。

知能の方面も亦然り、吾人の知識は皆な感官より起り來る。吾人の概念は皆な知覺より構成さるゝものにして其用は唯だ直覺を領會するにあり。次に吾人の思考に缺くべからざるものは我と非我との對立なり。吾人の自己意識は自己と外界との對立に基いて存す。されど自己以外に何物をも有せざる全一は毫も是等の性質をも有すべからざるなり。之を全智と云ふ。

眞に神の本質を定義するは神は人格的存在と云ふ能はず。

汎神論者が神を非人格存在と呼ぶは唯人間の不完全不圓滿を神に歸せざらんと欲するのみ。非人格と云はゞ人間以下に下さんとの語弊ありとせば神は超人格的存在と言はん。斯く云へばとて神の本質を定義せんとにはあらず。

神は人の精神の屬性を大きくして神を抽象する外に術なかるべし。藝術家が繪畫彫刻を以て神の姿を表現せんとするには圓滿なる人格の相を以てす。

されど神が眞に人間の肉體の相を有すと信ずるにあらずして尊き人間の姿は吾人に取て最高最切要の相なるを以てとす。吾人が人間の尊き精神的性質を以て神を表象せんとするも亦た之と異ならず。

表象的。吾人が神の神聖智慧等を云々するに當ては吾人は唯表象的の形容をなすに過ぎずして正く神の本質を定義せんとするものに非ず。之に依て神の本質に近づかんが爲に取るのみ。約言すれば是れ眞の擬人觀にあらずして表號的擬人觀なり。是れ宗教には避くべからざる擬人觀なり。吾人が知りうべき精神は唯人間の精神のみ。是故

に吾人は神にかゝる精神を有すとして神を抽象す。是れ實に神が吾人の寫象する通りのものなるが故にあらずして、吾人の觀念には、しか經驗を超ゆること能はざればなり。即ち吾人の善美の性質によりて表號的に神を形容せば人の善美の觀念異なるに隨つて其の神の觀念も亦た異ならざるべからず。是れ實に國民に依つて神の觀念を異にする所以なり。斯の表號的擬人觀にして哲學の思考と宗教の信仰とは互に相ひ接近すべきなり。哲學は知によりて全一の觀念に達し此全一の觀念に達し此全一の內容は知によりて規定する能はず。是によりて吾人が把捉することをうべき寫象及び形象によりて此觀念に內容を與ふるの一事は民族の詩的精神若くは宗教的天才の力に一任せざるべからず。斯の如き內容は飽くまでも表號的なるを以て之を以て宗教的信仰は科學の定義とすべからず。

科學は悟性信仰は情性。

シライエルが宗教の信仰と哲學の汎神論の調和の可能を論じて曰く、若し汎神論者にして神性を人格的に見るを不可となすものありとせば其は凡ての人格的意識の有限なることを認むる謙讓の精神に出るものなり。吾人が神を人格的に見るや否やは人々の想像の方面に依て異なるものなりと。即ち吾人の見る所と規を一にす。

神の超絶と內容

華嚴の十佛の自境界即ち神の汎神を認むると共に、果分不可說となし神の本質は世界に超絶せりと說くも、超絶と內在とは相ひ矛盾するものに非ず。超絶神論も神の自中存在なる世界を說くまた萬物の中に神の勢力の存在を說く。さればとて汎神論も神の超絶性を排斥すべからず。世界と神の本質とを同一視すべきものに非ればなり。

一、是れに於て自然は有限、神は無限、自然は神の中に沒入するも、神は自然界の中に沒入するを得ず。其本質より云ふも吾人の認むる萬物の本質は全く神の本質と同じきも、絶對なると、萬有の物と心との相待たると、同じからず。廣延と思考とを有す。

神の本質は萬有に超絶的なりと言はざるべからず。

汎神なくば目擊の自然界萬有は到底崇拜信仰する能はずと。答へて汎神とて決して

現實一切の事物を神的にして圓滿なるものと認むるにあらず。現實は神の勢力が實現せられたる客觀世界なり。

善惡の區別

眞善美の區別。神の本質は絶對にして無規定眞善美なり。本質と非本質とを區別するは知性にあらずして意志情性なり。萬有の中に或物を以て善とし、神聖とは即ち是れ神の本質を示すものなりとなすは情性なり。汎神論者に於ても自己が切要と感じ本質的と選ぶは超絶神者と異りなし。

本質に於ては汎神なるも自然界は力に實現せられたる客觀々念にして不定の意志なり。相用に於ては異れり。

歸趣の理性（目的）

目的と因果とは一體の兩面。目的と云ふも、世界以外に叡智の神ありて一定の目的設計の觀念を有し萬有を創造支配すと云ふ觀念を否定す。

萬有は物心兩界を通じて因果の法則に支配せられ一切の事象は悉く因果的に起るものなりとは現今科學の承認する所なり。

目的と因果とは同一

一、有目的の結合は諸の要素間の因果の關係を除外せずして却て之を豫想す。即ちすべての有目的の結合は同時に因果的の結合なり。

二、究竟性と云ふ觀念中には計畫を包含せず。即ち必しも目的の觀念を豫め意識せず目的設計なくして自ら目的に適ひ設計によりて起るが如き結果を生ずる活動を形容して目的衝動性と云ふ。

例へば建築家が家屋の設計を案出するは目的論的に制約せらる。辯士の演說も然り。吾人の生活も其進行は明瞭に若くは冥々の裡にか一定の目的を追求するよりして起る。一國民の行動も理想の觀念に動かされて起るものなり。

物質自然界の方面も生活現象だけは因果性と究竟性とは並存するを肯定するならん

例へば獲物を驅逐し一物を獲て食し消化するは生活保存の原因なり而も一方より見る時は生活は目的にして是等の官能は手段なり。

蜘蛛は蠅を捕えんが爲に網を張るにあらず。網ある爲に繩之に捕へられ蜘蛛口あるが故に蠅之に入り消化するなり。此場合に於ては唯だ因果の關係あるのみにして目的なるものなし。

吾人々間は執意と目的の觀念とを有するを以て因果的原則はまた同時に目的原則なりと云ふをうべし、と云はゞ唯物論者は人間と動物との差異は單に程度上の差異にすぎずと主張するに非ずや。

吾人は斷言せん。人間の生活作用は目的手段の觀念の有無に係らず悉く有目的の過程と見做さざるべからず。人間正に然らば倍々程度の上に異にする他の動物に於てまた否定する理なし。植物も營養作用動物と異らず。

若し生活現象の目的の存在を許さば自然界全體に亙つて之を許さゞるべからず。

動物界は植物なくんば存在する能はざるなり。植物界はまた堅硬の地殼が物理學化學の勢力によりて柔軟細微の土壤に變ずるに非ざれば生ずる能はず。尙ほ吾人此土塊が時々絶えず降雨の爲めに濕さるゝことを豫想せざるべからず。然るに雨はまた水が豫め大氣に由て吸收せられ其高層に運搬され然る後溫度の變化に依て凝結さるゝにあらざれば降る能はず。水が水蒸氣となつて上騰するには地球が太陽光線のために熱せらるゝ要あり。故に一片の華葉に於ても、全く遊星系のあらゆる配置あらゆる運動とあらゆる自然法との力を以てするにあらざれば生ずる能はず。

吾人若し自然界の一點に於て目的性を認めんか、勢ひ全く自然界に擴張せざるべからず。

普徧的平行論によれば無機界にも內的生活なしと云ふは誤謬なり。

卽ち內的世界卽ち意志の世界は物質界と廣延を同ふし精神は無機有機を通じて遍滿す。

嚴格に言へば物質界に於ては唯物的因果性の必存し究竟性は此物質界の方面のみより云へばすべての自然過程は徹頭徹尾因果的に說明するをうべし。此內的過程は徹頭

徹尾目的論的のものなり。

普遍的並行論は內的生活の存在は單に有機體にのみ限らず萬有に遍滿し有機無機兩界を通じて物質過程を目的論的に見るをうべきなり。

法身

本質と體量

法身の體。內容本質如何に就ては。唯物論者は實在の本質は物質的分子なりと曰ひ。亦た唯心論者は實體は唯觀念體にして物質は妄現に過ぎずと論じ。唯理論者は宇宙の本質は物に非ず心に非ず物心を超たる眞理卽ち眞如なりと曰ふ。また物心平行論者は物と心とは一體の兩面にして外觀すれば物質內觀すれば心質にして。若し密敎によれば宇宙の實體本質は物心一如これを六大無礙常瑜伽と曰ふ。六大とは地は堅、水は濕、火は煖、風は動、空は無礙、此の五大は物質にして識大は心質、六大卽ち物心二元が相依て萬物を成立す。相互に無礙なり。無礙の故に心として觀ずれば物も心ならざるなく、又物として見れば一切物ならざるなく物卽心なり。物を外にして心作用を現はすなく心を離れて物の用をなす能はず。

六大互に具し地大に他の五大を包含し他の大も亦然り、互に主と成り伴となる。一塵に一切世界萬有を具し一心に十界三千の理を備え、物心一如色心不二の故に常瑜伽と曰ふ。

六大は即ち物と心との二質なり。もと一體の兩面なれども此兩面は同等の位にあらず。心大は眞の實在にして五大は意志に實現せられたる現象に過ぎず。五大は何故に意志の實現なりや、曰く意志は心の力なり。

絶對觀念態が意志に實現せられたる相態を五大となす。堅濕燥動等は質にあらずして力なり。水大は觀念の相なり。寫象と意力を屬性とし絶對なるは精神なりとす。

密には現象即實在とし、華嚴には現象は力に實現せられたる相にして本質は萬有內在と云ふ。

華嚴によれば宇宙の實體本質は一大精神なりとし之を一心法界と名づく。亦た一切萬法を總括せる精神態なれば總該萬有心とも名づく。所謂精神態とは物心相待の心にあらず、絶對的精神。萬象は其實體上の影現に過ぎず。

內容無盡の德を具す（體具の德を明す）

上には本質精神態の形式的即ち絶對觀念態また理性態として明せり。

次に內容を明さば密敎に所謂胎藏、理に具する所の萬法なり。胎藏に數義あり。一、含藏の義。喩へば母胎に性を含藏して之を兒と養ふ如く六大法界體性能く一切の功德を含藏して失はず。二、隱覆の義。人の胎內に在て其體を覆ふが如く理體煩惱に隱れて顯現せず。

六大は其自體即ち法界體性智、大日なり。此宗には法界體性に人法相好を具すと說く。

此體性に四曼の諸德具足して闕減なき三密の用大を以て一切の活動をなす。

法界體性は無相法身即ち能生の本地身なり。無相とは遮情の言にあらず是れ表德の無相即ち萬德を具して差別の相なし即ち一切の相として具せざるなし。

法身の內容即ち宇宙心靈に內容無盡の性德を具足するも而も如々態なり。楞嚴には

之を表明するに如來藏妙眞如の性と名づく。藏とは無邊の性德を含藏するの謂なり。妙眞如とは而も本體常に一如の義。如來藏性本具十界身心土三千の理乃至事々無盡法を具して缺くる所なし。絶對心靈態は一如にして自然に無邊の德を備へ一切自己に有し常恒能動のみにして所動なく。人の內容の如くは外界の事物を經驗受容して其內容を充たす。宇宙全一なる法身は自己の外に外界なし。故に內容と名づくるも個人の如く受容的にあらず一切本來自己に有して自發的たり。

全體としての內容は外的の刺激を受けず。自己の內部より自發的にして外界より受容するものなし。

楞嚴に曰く、一切世界の五蘊六入十二所十八界乃至一切萬法及び地水火風空見識の大性は本如來藏性にして法界に周徧し。かゝる眞性は因緣に依てなるに非ず自然に在らず。一切萬法は周徧法界の藏性が隨緣循業の發現に外ならず。

華嚴によれば如來本質內容に圓融無碍十佛自體一切事理相即相入重々無盡不可說なり。性起と緣起とは體と用との無碍なり。性に無邊の德を具し緣に無盡の事を現ず。如來の內容には一切差別性を具存して而も常に一如なり。宛も人の才能ある人格に一定の精神は國家のためにもまた家族の爲にも科學的智識文藝等の複雜なる內面あるも精神其物は單純なり。

凡そ單純にして本來無一物なる精神の如きあらじ。而も凡そ複雜なるもの吾人の腦髓なるものにしかざるべし。また宇宙は一切の複雜を包容し複雜の極なる吾人の腦髓の如きも之れに洩れたるものに非ず。一切の複雜は單純なる如來藏性より產出せらる。凡そ其複雜の度は實に重々無盡と云はざるべからず。此體性を如來藏性と曰ひ全一の心態、內に無邊の性德を具し萬法を顯現すと云ふも歸する處は二大屬性なりとす。一切知と一切能、即ち絶對寫象と意志となり。地水火風空の五大は絶對意志に實現せられたる客觀々念にして識大は主觀的現象なり。故に知と能との屬性を有せる全一の心靈態なりとす。

法身に顯動と不動の二面あり

法身、如來藏性、永恒存在、全體大用、此に顯動と不動の二面あり。永恒常住涅槃なると世界因果生滅の顯動なると、前者を眞如不變と曰ひ後者を隨緣と名づく。常住不動の安立を求むるは前者に依り世界に在て活動せるは後者にあり。此二者何れもと同じく如來藏性の全一にして何の處に於ても如來の中に在りて離るゝことなし。

密敎には六大の法爾と隨緣とす。法爾とは法性自然の理體、隨緣とは顯現せる相と用とを云ふ。先づ六大の性德たる堅濕煖動無礙了別の方面を法爾と曰ひ方圓三角また青黃赤等の形色作用の方面を隨緣と名く。

六大皆な活動し顯現すれば隨緣の世界萬物となり六大本活動的にして常恒不斷遍動せり。此遍動の六大の外に寂靜たる六大存するに非ず。即事而眞。隨緣即法爾。眞如即萬法なり。是の如き六大能く一切佛、及び一切衆生、器界等と四種法身三種の世間と現ず。

即事而眞、現象即眞在、事に即して眞、轉變無常なる現象實體が常恒の活動より現はれたる現象なれば全體より觀ずれば常住不變なり。萬象の外に實在なく萬有全體即實在と云ふ。

生滅門。楞嚴に如來藏性淸淨本然にして不變にして隨緣隨緣にして不變、則一切世出世の法何れが如來藏性にあらずや。經に曰く、水の氷となる如く佛界即ち九界なるに喩ふ。又云く、氷還て水となる九界即佛界なるに喩ふ。水氷異りと雖も性何ぞ殊ならん。十界分つと雖ども藏性何ぞ別たん。經に曰く、譬へば虛空の體は羣相に非ず、而して彼の諸相の發揮を拒まず。虛空は藏性に喩ふ。七大五蘊六處十二入十八界等の一切因果生滅の萬有を諸相に喩ふ。藏性の體七大に非れば即ち七大も亦た體大にあらず。藏性七大の發揮を拒まず。此故に藏性即萬有なり。萬有は藏性隨緣の用即ち藏性本然不變の體。設し藏性なくんば一切世出世の法あることなし。當に知るべし即ち是れ藏性全體大用なることを。

（法身より天則秩序によりて發揮顯不の二面あり。法身の實體と現象の世界生滅と」法身より天則秩序に世界萬物と發展せられたる方面と」また生滅の世界より不生滅の涅槃界に歸元せると。）

生滅の世界と常住の涅槃界とは超然敎と圓具敎との二種の見解あり。超然敎には生滅變易の世界と常住の涅槃界とは其處を異にせるものとす。涅槃界を或は高遠なる彼岸に在るものとす。圓敎には娑婆即寂光この世界と涅槃界とは處を隔て求むべきに非ず。吾人が業識の所感は現感覺の世界にして佛眼所觀を淸淨土とし凡夫肉眼の所見と佛眼の所照とは同一體の兩面なり。

感覺世界は有眼にして觀念界は無限なり。此無限なる觀念界に常住の涅槃界を求む。

圓敎の涅槃界は所住の處に拘はらずして精神の如何にあり。若し凡夫の業識の所感によらば一切處として生滅世界ならざるなく、若し業識を轉じて全く精神が如來の中に依る時は處として寂光土ならざるなし。

故に法華經に、佛の曰く我は三界の如くに三界を見ず如實に三界の相を知見すと。又曰く、衆生劫盡きて大火に燒るゝ時も我が此土は安穩にして天人常に充滿せり、園林諸の堂閣種々の寶をもて莊嚴せり等。

密敎によれば現象世界は大日法身より流出せる萬象、一切諸佛登天は森然として嚴存す。

宇宙全體同一の大日なれども法身は密嚴淨土に安立し、報身は十方淨土に居す、應身は欲界の淨土に居し、等流身は人天阿修羅等に等流現す。

大日の淨土は自性法界宮密嚴國土と稱す。十地等覺の菩薩も如來の加持を離れて猶ほ見聞の境界にあらずと。然るに如來如實に自心を覺悟して本有莊嚴の淨土を開顯し十方諸佛と共に居す。其不可思議の境界を自性法界宮また密嚴國土と號す。淨土二あるにあらず。大日如來一心法界本有莊嚴の淨土なり。

華嚴によれば圓敎の佛土三類を立つるなれども悉皆華藏莊嚴世界、淨穢融即、相即相入、一多無礙、一微塵無量刹、塵々皆法界、此一塵を離れて華藏を求むるなかれ、一切顯動の萬物の中に寂靜の涅槃界、圓融無礙、重々無盡、諸佛華藏界中に在て凡夫自ら穢土を見る。

華嚴に淨穢圓融を說くとも宇宙其物に之を觀る衆生に十佛の自境界は相卽ながら凡夫の爲めには超絕界なり。超絕と云ふも超然主義の超絕に非ず內在的超絕なり。

絶對無限の神性と有限の自然とは同一視すべきにあらず。世界は如來の中に沒入するも如來は世界の中に沒入せるをえず。

圓敎に相即相融と云ふも現在の世界を即如來の圓滿なる眞境界と云ふべからず。如界の境界は絶對無規定にして世界は相對規定、また如來の境界は眞善美等の靈とし世來は然からず。

如來の中に在て自然に規定せらる。若し如來の爲めに攝取せられて心靈開發する時はこゝに在て如來の中に安立することを得。

穢土淨土は本より世界其物に關するにあらずして如來中の世界性なれば如來の恩寵の光によりて心靈開發する時は娑婆に即して淨土を觀る。

（華嚴生滅門法界緣起。法界眞如自性を守らず隨緣して生滅となる。生滅の本體本不變の自性なれば隨緣して生滅の諸法と成ると雖も而も自性を失はず）

生　産　門（緣起門）

（頌に曰く、生滅門には一切の云々）

法身はいかにして宇宙萬有を開發せるか。

或は唯一の神の權能によりて萬物を創造すと。神は超在と汎神とあり。具敎には汎神にして萬有內在の神の力によりて開發せられたる萬法とす。

密敎に法爾の六大は皆活動し緣して萬物と成る。六大の本性は常恒に活動し六大即ち物心の二元が相賴つて萬物成立し相互に無碍なり。此六大が法爾隨緣によりて有情非情種々差別の相を呈す。物の性用に差別あるは識の作用を有するが故なり。亦た精神に思慮分別等の種々差別を生ずるは物質に種々の性用具するによる。

無碍の六大が相依つて一切色心萬有を造る。萬有は六大より成立て主伴無量の關係を具有し因緣相待つて萬物を造作す。

萬有神敎は法身の大日なると共に一切塵にも悉く大日一切物々としてビル法身ならざるなし。吾人が一活動物なると共に一切の筋骨個々の細胞に至る迄で一として活物ならざるなしと曰ふ。

蠢々たる蠕動の類も皆大日の分身として造化の用をなす。人いかに化學が發達せるも人力を以て一の蠕動を造ること能はず、前の原形質より分殖す。故に人は人を造る造化の用あり。蛙は蛙を造る自然の用あり。

緣起門に三性として絶對の法身と因緣相待なると各個體の自發的との三性を要す。

絶對なる法身直接に一の動植物を造化するなし。一切の有機物は自己に原形質の分殖作用あり。例せば人の兒は人の所產なるが如く些少なる一草も其原形質なる核果より分出す。故に各個體を小造化と云ふことをうべし。有機物の自發的產出は夫より以上の因緣の相關によらざれば成立するものにあらず。例ば地球の萬物は太陽の關係を離れて草一本も生活することあらざるべし。故に各個々皆大日とし小造物とするも之を統一の一系統たる總體の大日なかるべからず。

總體の大日を學語にて云へば大精神と名くべし、此に體用相〇三大あり。

（現宇宙の現象をば天則秩序に一大意志に）

生產門。宇宙萬物の緣起を說くにキリストは神の意志とし儒道にては萬物と人と皆氣と爲とす。

佛敎。近くは前生の業力緣起、阿賴耶識緣起。阿賴耶識頓に根身器界種子を變じて能く自分の所緣を變現して、我法分別薰習の力の故に識生する時我法に似たり。六七二識無明覆ふ故に執して實我實法と爲し、之に執して業を造り生死窮りなし。故に其他の萬物識を以て本とす。

起信には眞如緣起あり。謂く一心眞如自性不動なれども他に隨て動轉して諸法の自體而も各異に似たり。平等を動かずして差別をなす。心生滅門とは如來藏に依て生滅心あり。隨染本覺、自性の不動を失はずして他の無明薰習するに隨て變じて業轉現の種々の差別の相を成す。經に不可思議薰、不思議變、是現識因なり。藏性隨他動の義、譬ば濕性の水是自性不動にして濕性を失はざる故に隨風の波是隨他動の義變動波浪の故に其起る波の風は是れ自性動の義あり。能動水の故に一心の義、亦復如是。自性不

動にして隨他の故に猶如凡夫澄一心源之時身隨他動の凡愚を具して四智圓明の正覺を成ず正覺の智に依て自性動の無明を滅す。風止む時波即ち水に歸し風是永滅す。

歸趣—終局目的—攝取門

攝取門には法身と、般若と解脱の德をもて、衆生の心を擇みては、開化し終局に歸趣せしむ。

攝取門とは還滅門とも云ふ。宇宙に天則秩序の理性に世界萬物を向上し生命過程を進化する理性の存在することは終局目的に歸趣せしむる方便なりと云ふことをうべし

如來はいかなる設備をもて終局目的に參與せしむや。

一切衆生に本能的に佛性を具有せるは終局目的の豫備せるものと云ふべし。衆生靈性具備せるも天然の人は無明に覆はれて自ら之を開發顯示すること能はず。此理性は本有の性德にして修成にあらず。

如來はいかにして終局目的に攝取し給ふやとならば、密敎には大日本地身より加持身を出現し本尊の三密と本來平等行者の心中に涉入相應し本尊三密行者の三業を加持し感應道交の故に有漏の五蘊と本尊無漏の三密との涉入相應により眞理を開顯し荊棘瓦礫の穢土宛ら衆寶所成の無漏の淨土の實相を開覺す。實は己心本具の曼荼の淨土なれば行者不往の相に住して自心の淨土に往生し本尊は不來の相にして而も己心の衆生を攝取し給ふ。

成佛とは法爾所成にして因緣所生の成にあらず。大日とは是れ衆生の本覺、今此本覺を了するを成佛と云ふ。

眞言行者曼荼羅を體となし三平等を宗とし三密を行とし金剛寶藏を開顯し心の佛國土を嚴淨し遮那覺位を證す。

法華經の意によれば釋迦牟尼佛久遠劫實に成佛せしより常に一切世界に於ても說法敎化す。其中間に於て燃燈佛等の名字の不同年紀大小を說いて亦涅槃を現し種々に方便して衆生を度す。或は己身を說き或は他身或は己事を示し他事を示し言說する處皆な實にして虛しからず。

有佛無佛性相常然、如來法身の法般解の三德の性能は法界に周徧す。是れ則ち衆生を終局に攝取の理性なり。

法身如來の性能たる三德の理性は本來法界に周徧し之に接觸するもの知見を開き解脱靈化の益を蒙るべきなれども衆生無明に覆はれ自然に因果律に規定せられ自ら此德性に參與すること能はず。如來の智悲自在の力より報應二身を出現し衆　を攝して涅槃界に歸趣せしむ。

即ち因には法藏と名づけ大願大行を起して衆生を救濟の誓を現じ果には十劫正覺の佛身を示せり。即ち盡十方無碍光王如來と名け、所有一切の萬德を聖名に表し、至心信樂の回願心を攝して已に亡びたるを復活し目的に攝取す。

また應身を示して人類を敎化度脫す。十方一切諸佛賢聖は衆の爲に佛知見を開き佛の正道に悟入せしむ。即ち終局目的に歸趣の理を示さんが爲めに出現し給ふなり。

論註に如來に二種の法身あり。即ち一、法性法身、二、方便法身。法性法身は本有の佛身なり。

如來の體用は本より法界に周徧せるも方便法身之を示すにあらざれば衆生之に關すること能はず。

智論には佛に二種身あり。一法性身と二父母所生身となり。是の法性身は十方虛空に滿て無量無邊なり。色像端正にして相好莊嚴せり。無量光明無量の音聲あり。聽法の衆も亦虛空に滿てり。此衆もまた是れ法性身なり。生死の人の所見にあらず。常に種々の身種々の生處にして種々の方便をもて衆生を度す。常に一切を度し須臾も息む時なし。是の如き法性身の佛なり。能く十方の衆生其の諸罪報を受るを度する者は是れ生身佛なり、生身の佛は次第に說法すること人法の如し。又云く法身佛は常に光明を放つて說法す。罪あるを以ての故に見ず聞かざること譬へば日出づれども盲者は見ず雷霆地を振へども聾者は聞かざるが如し。是の如く法身は常に光明を放つて說法すれども衆生無量劫の罪垢厚重なることありて見ず。また明鏡淨水面を照す時は即ち見垢翳不淨なる時は所見なきが如し。是の如く衆生の心淸淨なる時は即ち佛を見る。若し心不淨なる時は則ち佛を見ざるが如し。

法身とは密家に云はゞ金胎不二、理智一體、是法界の體性なり。此體性に無邊の性德を具して衆生の身心の體となるも衆生は之を知らず。自己本來大日たるを識らず。

法執に則りて正覺を成ず。

般若は如來の一切慧。密には五智の光照常住三世暫くも息むこと有ることなき平等の智身なり。五大所成の智三密三身。

大智慧光明、處として照さざるなし。斯の智光一切に洽ねく此光によりて心靈を開發し、一切慧が自己の心靈の窗開かる時即ち佛知見を開く。一切慧に四種あり、即ち四智なり、

大圓鏡智は一大觀念態なり。即ち主觀客觀の一體なる觀念なれば人の靈性開發して此鏡智と相應する時自己と法界と同一の大觀念態なるを覺る。

平等性智は絶對理性なれば斯智と相應する時は吾人の心靈内容と即如來性智の本性と本來一體。肉の情を脱し如來大我と融合し而して如來眞理の光自己の心靈に徹照し斯靈智より本來我執を離れたるが故に如理の知見なり。

妙觀察智の德により生佛感應、相即相入、事々無碍の妙用より衆生の意識を感應道交し、三密加持神秘の妙用によりて人々の知見を開示し大我に融合せしむるは斯の智用にあり。

成所作智は衆生の感覺性を美化し微妙の感性清淨國土の莊嚴を成せしむ。

如來般若の德によりて自己の心靈と相應する時は四智圓明。即ち本覺の一切慧と初覺の心靈と現じ來る。密家に所謂る金剛薩埵一切有情の心質の月輪が月の初日より日々漸く加て十五日圓滿無碍なるが如し。瑜伽行者の三業と大日の三密と相應自淨月の圓滿に五相成身を成し無上菩提を證し金剛の身をえて、五相具さに備れば方に本尊の身を成ず。其圓明は即ち菩賢身十方諸佛と是れ同じ、亦た三世の修行證に前後あるも悟達に及び己れは去來今なし、凡夫の心は合蓮華の如し。佛心は滿月の如し。此觀若し成じぬれば十方國土の若しは淨若しは穢六道の含識三乘行位及三世國土の成壞衆生業の差別菩薩因地の行相三世諸佛悉く中に於て現じ、本尊の身を證し普賢一切の行願を滿足すと（菩提心論の意）

解脱―解脱の德は一切衆生は世界の因緣に規定せられ業に束縛せられて感情及び意志の束縛をうく、斯の德性に即ち一切惠と能との德によりて衆生の感情及び意志を解脱靈化して如來の中に自由を得せしむ。

衆生を解脱靈化する性能を三種に分つ。

一、神聖、眞理の光無上の權利ありて人の心靈を照し道德自律を規定し。

二、正義としては己を犧牲に供し積極的には聖意の目的に隨順して靈的活動をなさしむ。神聖は自律的に道德の司導とし正義は六度八正等の職務をつとめしむ。

三、恩寵としては無明に盲ひたる衆生に佛知見を與へ心靈を復活し心情には如來の内容に融合し意志を靈化して心靈を更生し有餘の依身を有しながら神は涅槃界即ち淨土に安住し、如來司導の下に行動し壽命盡くる時は正く報土即ち無餘涅槃界に歸し、無上正覺を成じて無住所涅槃に住して未來際に衆生を度す、之を終局目的とす。

已に終局に歸る時は本覺始覺と一致す。

大正十二年二月二十五日印刷納本同二十五日發行
毎月一回二十五日發行　誌代一冊貳拾錢　一ヶ年貳圓

編輯兼發行人　山崎辨成
東京市京橋區本八丁堀一丁目十五番地
印刷人　秋場熊太郎
東京市京橋區本八丁堀一丁目十五番地
印刷所　秋場印刷所
東京市小石川區水道端二丁目四十四番地
發行所　ミオヤのひかり社
振替東京四九三四八番